



## 特別展

### 「古地図—地図が語る歴史と文化—」

を終えて

地図は、人間の生活する地上のリアルタイムの、自然的、社会的環境としての空間と、その表情を、二次元の紙面に、いつでも目的に応じて取り出せるような、情報凝縮プロセスを踏み、かつその時代の文化的関心に応じて表現したものである。それだけに、地図は、各時代の断面を私達に示しているといえ、そこから、環境や世界をどのように捉えたかという、その時代の人々の世界観を知ることができるのである。そうした時代の断面性と、もう一つ大きな役割を地図は持っている。それは、現代との連続性を認識させることである。いわば、過去の地図から現代を覗くことである。例えば、大航海時代の幕開けと共に展開された、ヨーロッパ諸国のアフリカ・アジア・中南米への進出と、植民地時代、そこに派生し、今日まで厳然と流れる政治・経済・文化的影響についても、当時の地図は、考察の有力な手がかりを与えてくれる。また、製作当時の意図を離れて、古地図が直接的に現代と結びついて生き返ることもある。例えば、伊能図の小笠原諸島と、インテルサット衛星測定のそれとの位置的ズレから、同諸島が年間平均何cm動いたかを知る大きな手がかりとなってよみがえることなどである。地図は、実に様々なことを物語るのに、そうしたことを現実に展示で語らせることは、これがまた非常にむづかしいことであると思った。

まず、第1部「地理的視野の拡大と地図」には、本特別展の導入的意味をもたせた。ここでは未知の海外知識を、イメージから知らされたわが国の世界図製作の特質等を明らかにすることができたと考えている。第2部「古代・中世の地図」では、わが国において、絶対数が限られる中で、日本最古の地図や、岡山県関係の地図など、主だったものをすべて展示し、それらの地図が物語るものは何かを問いかけた。第3部「近世の地図」は、郷土の歴史と文化を説明する上で、大きなウェートを持つと同時に、江戸時代における、地図の急速な発達と多様化について、各種の周辺事情などと共に考えてもらうことをねらった。私たちの側も、最終日の閉館まで、地図とほぼ毎日対峙して、実に多くのものを読みとることができた。それは、一面新しい事実の発見の連続でもあったが、また、今まで私たちが見過してきたことの多さへの驚きでもあった。

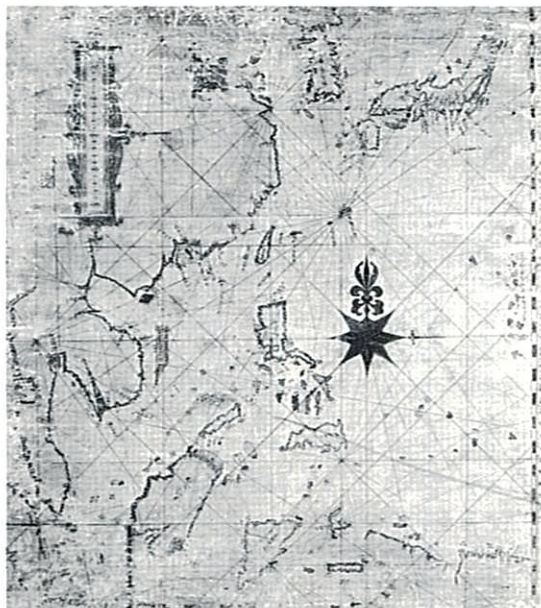
本特別展の企画の段階で、河野通博関大教授、海野一隆関大教授・織田武雄京大名誉教授には、いろいろアドバイスをいただいた。10月16日(日)には海野教授の「日本人と地図」と題する講演会を開催、本館講堂は聴講者であふれ、盛況であったことを付記しておきたい。

## ◎地理的視野の拡大と地図

中世以前の日本人は、日本・唐・天竺を世界のすべてと考えていた。彼らの世界観のよりどころは仏典などから得た知識であり、彼らが抱いたのは仏教思想に基づく須弥山系の宗教的・想像的な世界像であった。仏教的世界観によると、我々人間の住む世界は、須弥山の南方海上にある南瞻部洲とよばれる卵型の大陸であるという。こうした須弥山系の宗教的世界を表現する地図、すなわち五天竺図や南瞻部洲図は、16世紀中葉に始まった日欧交渉によって新しい世界知識が導入され、地理的視野が拡大した近世においてもなお、一部では製作が続けられていた。

とはいえ、欧製地図の伝来が、日本人の世界観や地理観に根本的な変革を促したことも事実である。オルテリウスやマテオ・リッチ等を原図にした世界図や旧来の行基図とは異なる図形の日本図が、近世初頭の時代好尚を反映して、装飾性に富んだ屏風に仕立てられたのも故なきことではない。これら地図屏風は一般に精度が高く、また表示内容も文禄・慶長の役の輸送路、交易地の地名・里程・商品名を列記したものなど多彩で、各種の情報を詰め込んでいる。

浄得寺本や河村家本らの地図屏風が描かれた時代は、日本人の海外進出・海外渡航が著しかった時期でもある。そこで、安全な羅針盤航海のために必要なポルトラノ型航海図への需要が高まった。ポルトラノの遺例は数少ないが、対外貿易に活躍した伊勢大湊の角屋七郎兵衛所用と伝えられる羊皮紙製のアジア航海図はその代表的なものといえよう。



重文・アジア航海図 桃山-江戸初期 神宮徴古館蔵



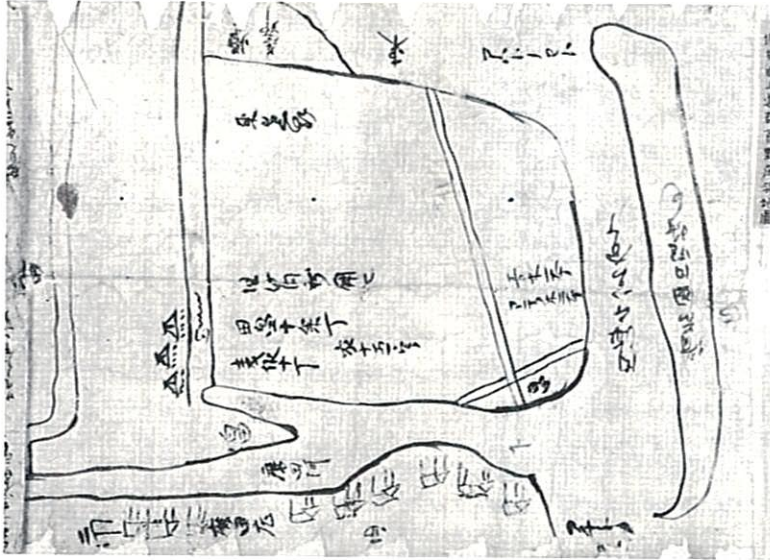
## ◎古代・中世の地図

わが国で地図がいつ頃作られ始めたのかは明らかでない。文献にみえる最初は、『日本書紀』の「宜観国々壇境、或書、或図、持来奉示」という大化2(646)年の記事であるが、その実態は不明であり、律令国家が班田取授法を実施するため、土地台帳として作成した田図も残存しない。今私たちが見ることのできる最古の地図は、奈良時代の「東大寺開田図」や「額田寺伽藍并条里図」などである。その後、有

力寺社や貴族たちによる大土地所有が進み、庄園制が展開する過程で、庄園の様子を描いた多くの地図が作成された。作られた状況はさまざまでも、それは、庄園の境界を明確にするためであり、自らの経済基盤を確保するために描かれたものと考えられる。郷土関係で、伝えられているのは「備中足守庄絵図」と「荒野庄図」の2点のみであるが、そこには、文献資料では語り得ない、当時の庄園内外の状況がうかがわれて、興味深い。

現存する古い地図の中には、以上のような小地域の状況

を記した地図のほかに、日本全体の姿を描いた地図＝日本図がある。文献の上では、最初奈良時代に、律令政府によって作られたことが考えられるが、その実態は不詳で、今残る古い日本図は、一般に「行基図」と呼ばれる類のものである。ここでは、現存する日本図のうち、最も古いとされる仁和寺所蔵の日本図（嘉元3＝1305年）をはじめ、5点を展示して、次の江戸幕府による地図作成の意義が理解されやすいよう配慮した。



◀ 荒野庄図

正安2(1300年) 大宮家蔵

## ◎近世の地図

### I. 幕藩体制と地図

江戸幕府は、国土の実態把握の必要上、慶長・正保・元禄・天保の都合4度、諸国に国絵図の調製を命じた。岡山大学附属図書館「池田家文庫」には、備前国絵図をはじめ約3千点に及ぶ各種の地図が所蔵されている。限られた期間の中で、同文庫の調査を実施し、同文庫の地図を中心に「幕藩体制と地図」という視点で展示構成した。

いうまでもなく、封建領主にとって支配領域の詳細な地図の作成は、領国支配上、不可欠の要素であり、地図の中に幕藩体制の縮図が投影されていると考えられる。幕命により調製された各時期の備前国絵図を比較すると、記載様式や事項に差異が認められる。しかし、正保国絵図の調製基準である「国絵図可仕立覚」(31ヶ条)の示達以降は、その描写・縮尺や村名・村高の註記等、次第に記載様式の統一化が図られる。これは、幕府権力の確立と全国的浸透を意味するものと考えてよからう。今後の研究課題としては、他地域の国絵図と、記載様式等細部にわたっての比較検討が必要であろう。

また、岡山・松山(現高梁)・津山の各城下町図では、領

主の城下町建設上の意図が窺い知れる。武家・町人・百姓屋敷等は厳然と色別して描かれ、その職能的居住区分は、近世的身分秩序をも明確に示すものであり、軍事・防衛及び商品流通の拠点としての城下町は、まさに封建都市の様相を呈していた。現在、近代的な都市計画の中で消滅しつつある郷土の歴史を再認識させるものであった。

さらに、「中国行程記」や矢掛・藤井の両宿場図では、旧山陽道沿線の様子や宿場の町並みを概観した。宿駅は、幕府による全国交通網の整備の中で、主要街道に設置されたものである。公的な交通施設として、幕府役人や参勤交代大名の休泊と貨客の継送り(伝馬役)、公用通信の業務を担ったが、その伝馬役の負担を、街道に面した間口間敷を基準としたため、間口が狭く奥行が長い宿場特有の集落構造となっていた点など興味深いものがあった。

岡山藩が、干拓事業において先駆的役割を果たしたことは著名であるが、それは藩主池田光政による17世紀以降における児島湾北岸の新田開発政策に端を発している。その過程で作成された計画・完成図には、計画段階での干潟の状況・海深・海流などの詳細な調査報告が記され、また、築堤・排水処理方法など当時の土木技術の水準を知る上でも貴重な資料といえよう。





備前国絵図 慶長頃 岡山大学蔵

## Ⅱ．学問の発達と地図

江戸時代、特に中期以降は学問や印刷術の発達と社会的要請の高まりにより、多種類の優れた地図が作成・刊行された。まさに、この時代は地図の多様化と量産化の時代であり、また科学的地図への黎明期であったといえる。

＜海防と地図＞ 鎖国下のわが国でも、蘭学の発達や列強の日本近海への進出により海外への関心が高まり、また、海防面から世界情勢の把握・沿岸図の作成が必要となった。特に、ロシアの日本侵寇の噂が伝わると危機意識が高まり、海防論が展開され、日本近海の地図や国防的地理書も簇出した。展示は、これらの事情を雄弁に物語る資料として、林子平の軍事的地理書ともいえる「三国通覧図説」・同付図・林子平の誤りを指摘した古川古松軒の「三国通覧大略之図」。また、漂流民として知られる大黒屋光大夫の見聞を聴取撰述した「北槎聞略」等関係資料からも、急務とされた海外知識撰取の一端が窺える。ここに見られる極東の地図は正確な地図とは言い難く、えぞ地など日本北辺部は想像図の域を出ないものであり、正確な実測日本図は「伊能図」の完成まで待たねばならなかった。

幕府は海防の必要からも日本沿岸図の作成を急務と考え、伊能忠敬を登用して、日本沿岸図の作成に当たらせた。「伊能図」は地球を球面と見なし、天測により緯度、実測により、位置・形・距離を求め、投影法により経緯線を描くなど、科学的な日本図である。今度展示した伊能中図（副本写）等を通して実測地・測量法や精度の高さなどを知ることができる。

また、羅鍼・象限儀・地平儀等各種の測量関係資料により、当時使用された器具や測量方法を探ってみた。

＜蘭学の発達と地図＞ 江戸時代中期には、西洋諸科学研究の道が開かれ、西欧のものを典拠とした地理書、世界図が多数つくられた。世界地図は従来のマテオ・リッチ系の楕円形世界図にかわって、平射図法等による両半球図が普及した。これらの代表的な地図である司馬江漢の「地球全図」、世界に誇り得る高橋景保の「新訂万国全図」、箕作省吾の「新製輿地全図」など5点を紹介した。これらの世界図は西欧諸国の地図を原典とし、独自の調査資料を加えて作成した科学的な地図で、地図の発達や探検の跡を辿ることができる。また、

地図には図説や地誌の説明が付され、当時の世界観・宇宙観も知ることができる。また、多くの世界地理書が刊行されたが幕末に広く流布し、多くの人々を啓蒙した地理書に箕作省吾の「坤輿図識」「坤輿図識補」がある。

＜地図の普及＞ 江戸時代には印刷術の発達と庶民の需要の増大により、さまざまな地図が刊行され普及した。日本図では地誌の要素をもつ石川流宣の「本朝図鑑綱目」、科学的な地図に近づいた長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」が代表的なものである。他方、庶民の寺社参詣の盛行により、「金毘羅参詣海路図」「四国八十八ヶ所札所図」など道中図・名所図が普及した。また、地図は絵説日本図や地図皿など娯楽・装飾等多方面に利用された。

## 岡山県立博物館だより No.19

発行日 昭和57年12月10日  
 発行者 岡山県立博物館  
 館長 高田 哲夫  
 岡山市後楽園1-5  
 ☎(岡山)72-1149